

個体発生初期における発達モデルの帰納,
および出生後生活への演繹

II

濱 畑 紀

**A Development Model Induced from the Early
Period of Ontogeny and the Deduction
to the Life Stages after Birth**

II

Osamu Hamahata

Summary

The model of development which was found in the innate life, was deduced among infant's behaviors after the birth. Also some propositions which are used to construct the model, were changed into the hypotheses, to verify among the life starting just after the birth.

As the result, it was manifested that sucklings choose mother's breast rather than herself as the object of identification, but the mother much later than that stage. It was clarified that sucklings' behaviors which had contemporarily been believed "heteronomic" were to be regarded as "self-regulative" or "autonomic". Moreover, it was suggested that sucklings were tended to behave in rational, logical, objective, social, but infants in magical, intuitive, subjective, and self-centered way. It was also discussed that the life characteristics grew from the suckling stage to the infant, in antagonism between old and new item, and in the process of integrating those two items. It was also stated that the mutual relationship between the infant and his mother is productive with the breast-centered on the suckling stage and on the infant stage with the mother-centered. And on the infant stage, it was known that mother was authoritative but that the infant was submissive, and the way of involvement was mutual.

Moreover, the structure of the proposed model was examined on the base of Piage's assertion. As the result it lead to the knowledge that requirements of the structure were all met; (1) The system of changing; elements on the first half stage shift, so to speak, dialectically to the second stage, (2) Automatic adjustment mechanism; in that case items or elements are inevitably and automatically chosen in order to change the structure, and (3) wholeness; all elements of each

stage are firmly bound with a system (in this case, grammar).

Judging from the fact that a basic task for the organism was to intake nourishment to maintain its life, it was reasonable to think that, even after the birth also, intaking nourishment was regarded as the main task of the development.

Thus, it was proved that the developmental model was regarded as appropriate to the infant stage as the structure, then that model should be applicable to the most of problems in our real life, that is to say, to be discussed as the standard of the life.

(Received April 30, 1987)

Key words : Fetal life, Principles of development, Autonomy, Heteronomy

問 題

先に(1985)胎生期での個体の生活から得た前提となる理論的諸命題から発達モデルを構成した。今回はこのモデルから誕生後の生活を予測し、これを演繹仮説として検証していきたい。従来心理学的な研究から、人間心理をモデル化することには余りにも独立変数が多すぎて、至難の業に近かったのは言うまでもない。しかし、先には、観察可能で要素の数も限定されてる胎生期に焦点を合せて、発生(発達)モデルを構成してきた。これをそのままの形で仮説として個体の出生後にまでも展開した場合には、それは真であるか、偽であるかである。真である場合は問題はないが、偽である場合には、胎生期の命題に帰って、それが妥当であるか否かを見直さなければならない。もし、その場合、やはり、胎生期の命題が事実と照合した場合、すなわちその命題があくまで真ならば、それは、そのまま人間の自然的あるいは教育的・規範的な法則としなければならないだろう (Laughlin Jr. C. D. & d'Aquili E. G. 1974)。

さて、それぞれの仮説について検証し得た場合には、「法則として確定」とすることにする。しかし、これは永久に確定されたものではなく、児童期以降の段階での演繹と胎生期への帰納の繰り返しによって、異なる法則に換えられるかもしれない。いわゆる蓋然的な法則確定であるに過ぎないのである。ついで、Piaget の構造の要件に照らし合わせて構造モデルの妥当性を検当することにする。

定 義

[依存性] 依存性とは、自分の欲求を充足させてくれる大人にたいして、なんらかの形で働きかける行動傾向をいい、主として、近接を求める、助力を求める、承認を求める、賞賛を求めるなどがある(吉田122)。

O. H. Mowrer, や R. R. Sears は、S. Freud の理論と学習理論とを統合させた研究者といわれている。彼らによれば、乳児は母親を本来なんら魅力のない中性的な存在としてみているが、母親から乳を与えられたり、不快な刺激から身を守られたりすることが反復されると、次第に母親そのものに愛情や依存を示すようになるという (Mussen 1968, 675~676)。

[主観性・自己中心性] 幼児は客観的法則によって支配されているはずの外界の事物・事象を、自

分のもつ限られた観点からのみ判断することをいう。すなわち子どもは自分自身の立場から離れて、物を見ることができないことを意味している。このためピアジェは、「实在論」・「汎心論」・「人工論」というような言を用いて、幼児の外界の特徴的な把握のしかたを説明している(大伴1971, 191~212)。F. Künkel もその発達曲線の中で幼児期を主観的な時期であるとしている(Künkel 1930, 141~145)。

〔直観性〕乳児期に分化した諸概念が統合されると、1つの論理体系ができるが、これは母親と幼児を頂点とする体系と重ね合わせられる。そして新奇な概念が出現すると、これはその論理体系の中に位置付けられていく。この一元世界(あるいは体系)への瞬時の組み込みが行われたり、またこの世界(体系)のある要素への確認が成立するときを、「直観」という。すなわち論理性の対立概念は「一元性」あるいは「直観性」なのである。

〔魔術性・神秘性〕子どもは目の前にあるものを偶然にいじる。いじることからイメージを生む。このイメージの世界は極めて非現実的である。それは、風にゆれる草や花や雲などをまるで生命があるかのようにあつかい(汎心論)、おとぎの話の中に出てくる森や泉の精が現実の世界にも住んでいると信じ(实在論)、あるいはおまじないをすれば何でも自分の望どおりになる(魔術的因果)という自己中心的な世界である。O. Kroh (1944) はこれを神秘的思考といっている。

〔観念性〕具体的事実を離れて、観念だけに偏る傾向のことで、Piaget による直観的思考および概念的知能についてのいくつかの実験がこれを裏づける。

〔情緒性〕感情の中で、喜び、悲しみ、怒り、恐れなどの欲求の満足や阻止によって起こる感情を特に情緒という。受動的であるが、衝動的、爆発的な強い感情である。情緒は人生周期にて交互に出現する心理的特徴である(Remplein, 1956)。特に乳児期には理性的とみなす行動は把握できないが、情緒性を幼児の心理的な特徴とした。Werner は相貌的知覚として子どもは電車であれ樹木であれ、風であれ、視覚や聴覚でとらえるすべての事物や、事象が人間と同じように顔をもっており、それが時には怒ったり、笑ったりするように見えると主張する。いいかえれば、この時期の子どもの知能には感情や情緒がいろいろ混じり(混同性)、両者の関係が分化していないのである(矢田部1953, 76~83)。

C. 乳児・幼児期

イ. 乳児期

乳児期はふつう、誕生より1カ年ほどまでをいう。したがってまだ歯がなく、直立歩行ができない。言語未修得であり、主として母乳のみを栄養源としている期間であると規定できようか。つまり、概念的には、乳児とは完全離乳にいたらないで、「はいはい」によって身体を移動させつつ、ときには「えんこ」をし、危なげにつかみ立ちをし、せいぜい喃語を発生する能力をもつといえる。

この時期の乳児の対象者は養育者であり、あるいは母親であるとするのが通説である。しかし、乳児側から見れば乳房あるいは哺乳瓶であるといえる。なぜならば、乳児の視力は中心視力1.0であるが、中心窩から離れた網膜周辺部の視力はきわめて低く、0.1前後にすぎない(原田1978, 98~101)。したがって母親の顔よりも乳房(哺乳瓶でそだてられている場合には哺乳瓶)が乳児にとっては認知しや

すく、それが直接の栄養源であればなおさらのこと、世界内で最も重要な対象となる。したがって、乳児は母親にたいしてよりも、乳房に対してより強い対象関係をもちやすいと考えたほうが妥当であろう。さらに授乳行動全般をつうじて、一層この対象関係はたしかなものになるにちがいない。つまり乳房は栄養源であるのはもちろんであるが、満腹時ですら手先で乳房とあそび、また乳房に顔を埋めたり、顔をこすりつけたりして、恐れや悲しみを紛らわせる対象だからである。

H. S. Sullivan は、母親が母親として認知されているのではない、認知されているのは、眼前の乳房であり、口中にふくまれる乳首である、そしてこの乳首は母親の胎内にいるような安心感をあたえてくれると言った(1954, 62~91)。筆者の主張はだから乳児の同一視対象は母親であるというよりもむしろ乳房（あるいは乳首）であるとする Sullivan と同じ線上にあるといえよう。

仮説O. 『母親（養育者）からのスキンシップという刺激によって、乳児の発達が始まる』

「検証」 乳児が授乳されるとき、おむつの取り替えをされるとき、あるいはそのたのさまざまな機会に母親と肌のふれあいが生じる。このふれあい（スキンシップ）に刺激されて乳児は成長（分化）する。猛獣をはじめとする哺乳動物の母親は生まれた仔がまだ若いあいだは、その仔を余念なく自分の舌で舐めまわすが、それによって便の通りをよくしているのだという。

スキンシップについては H. F. Harlow (1959, 68~74) 夫妻による実験が有名である。夫妻は、母ザルとの接触の快感が仔ザルの成長にとくに大切であることを示した。母ザルから離された仔ザルは毛皮でつくった代用母ザルにびったりくっついて、たとえ代理ザルが動かず、反応もせず、物理的欲求を満足させなくても離れない。ヒトの新生児の状況がこれとまったく異質であるわけではない。しかし残念ながらヒトの新生児についての実験は報告されていないが、接触による刺激を母親あるいは母親代理からの諸刺激と理解すれば多くのデータがある。Douglas と Ross D. Park および Simpson は、親が慢性の疾患で死亡した子どもたちにある種の知的障害を見いだした (Rutter, 85に引用)。

情緒についても、やはり親からの多様な刺激がその分化に寄与しているものと考えられる。Michael. Rutter (1972, 184) は多くの実験を検討して次のような仮説をとっている。急性の悲痛反応的症狀（情緒障害）はおそらくはボンドの形成過程（ここでは結びつき——つまりボンド——の対象が母親である必要はない）が崩壊したことによって生じるものであり、発達低下と知的遅滞は、知覚刺激と言葉をかわす経験の不足という、2つのできごとの結果であり、——矮人症はたいていは栄養不足のせいであり——夜尿症はあるばあいには、生後5年間におけるストレスにみちた経験の結果であり、——非行は不和の——そして精神病質はたぶん、人生の最初の3年間に、ボンドもしくはアタッチメントの発達を達成することができなかったことによる一連の最終結果であろうというものである。そして、ボンドもしくはアタッチメントはその形成のすべてを母子間の情緒に負うというものである。

[以上の理由によって本仮説は法則として確定できよう]

さて成長（分化）とは何かが疑問となるが、次の仮説1によってそれを論じたい。

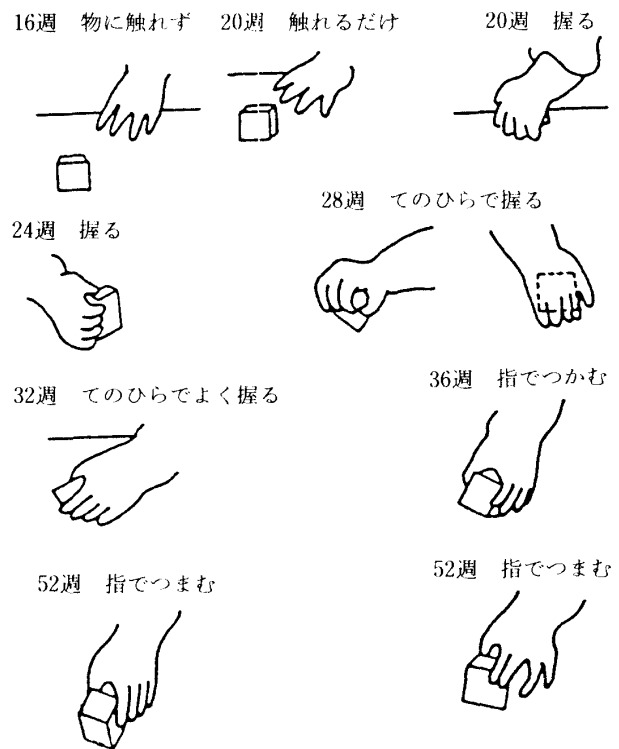
仮説1. 『個体は分化による発達をおこなう』

「検証」 色彩の弁別ができること，母とそうでない人の顔の弁別，手による把握行動の分化（図1参照），歩行運動ができるようになったりするが，これらは脳の神経中枢および神経系の分化がすすんでいるとみられるものである。しかし，一方の手に玩具をもったまま他方の手に別の玩具をもたせようとすると，前からもっていた玩具を落してしまう。たよりなげにお座りしている赤ん坊に玩具をあたえると，赤ん坊はしばしば後に転倒してしまう。これはそれぞれの器官が十分に分化していないための現象である。発語も一歳後半あたりから1語，2語と増加するが，単語数の増加はそのまま認知の分化を示す。さらに幼児期にはいって，命名期から羅列期になると分化（環境の認知）もきわまる。それらはまだ統合されていないため，文法的には意味のない単なる単語あるいは概念の集合ではあるが，しかし分化した姿といえる。思考についても Piaget によるシェマの1つ1つの獲得は思考要素の獲得であり，それが分化であり，感覚運動の段階の前半に相当する期間がその獲得過程であるといえる。

情動については，K. M. B. Bridges (1932) が誕生から24箇月までに予想される情動の発達の尺度を構成した（図2）。彼女によると，誕生時のいわゆる未分化な興奮状態から分化はすぐに始まり，次第に諸種の情動の発生機序が成熟してくることが知られるであろう。そして幼児期に入ったときにはすでに分化は完了しているのである。

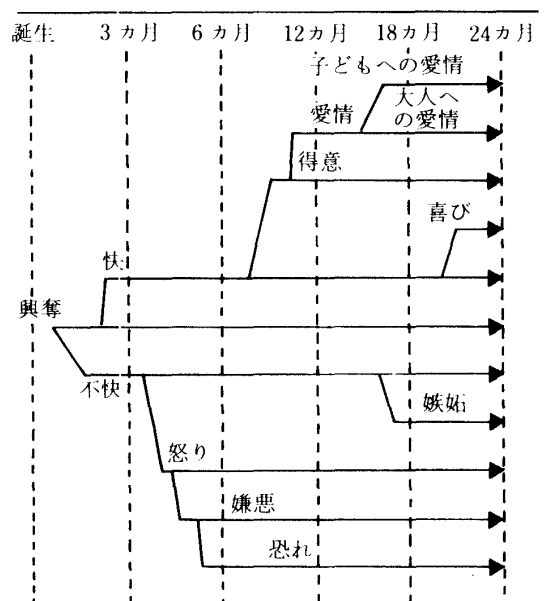
乳児期中期には乳房と連続している母親の顔，および同朋やその他の大人の顔や声などを認知していくが，やはりこれらも分化である。この点についてのみ考えると，対人認知の分化はそのまま社会性の発達ということになる。幼い社会性が発達するのである。微笑反応もまた社会性の一要素とみられる（J. Kagan. 1971）。また，他の赤ん坊が泣き始めるとそれに呼応して泣きだす「もらい泣き」行動も，あるいは近くに他の同年令の子どもがいれば手を差し出す行動（S. Schachter, 1959），またさらに「指差し」行動も具体的な社会性の発達とみることが

図1 つかみ方の分化発達



(Halverson, H. M. 1931, 山下俊郎 1971)

図2 情動の発達（ブリッジス，1932）



できる (Shaffer, 1984, 90)。以上、乳児は分化を主とした発達を行なう。

[したがって法則として確定]

仮説 2. 『乳児は乳房とは相互的な行動関係にある』

「検証」 乳児は望むときに泣きだせば、乳房が近寄ってきて、口に含ませて乳を吸わせてくれるし、望むときに口を離し、あるいはそれから遠く離れて遊ぶ。文字通り、乳房とは身体的に分離されている。排泄をしたときには乳児の身振りから母親はそれを察して取り替えてくれる。さびしいときには彼女が慰めてくれる。環境は応答的であり、相互的であるといえる。しかし、全く乳児は独立した存在ではなくて、彼の世界の内に乳房という存在を意識し、その存在（対象）の行動によって乳児自身の行動もそれに添ったものになっている。いわば「つかず離れず」といった関係を保つ。また母親自身も望むときには乳児が吸啜してくれる。母親が乳房が膨満してきたときには乳児の口に含ませさえすればいい。乳児はきっと吸啜してくれるだろう。相互的な関係にあるのである。

[したがって法則として確定]

仮説 3. 『乳児は自律的な生活様態をもっている』

「検証」 Adolf Portman (1976, 24) は、人間の乳児ほどたよりのない存在はない、といっている。たしかに乳児は飲むにも食べるにも、排泄にも、移動にも、母親や大人の手を借りなくてはならない存在である。したがって乳児は依存的な存在である、というのが従来の考え方である。

だから、この冒頭の『仮説』で「自律的な存在である」とするのは、意外な感がなくもがなであろう。しかしこれは単に「自律的」を定義してみればよい。「自律的」とは autonomic の語が意味するように自己調節のできることを、すなわち自分で選択し、自分で段取りを考えることである。ところが乳児にはこれが可能なのである。

子宮腔内にあるときは、養分摂取は、母体の生理的・生化学的プログラムにしたがって行われていた。アルコールもニコチン、その他の薬物も胎児の好むと好まざるとにかかわらず胎児体内に導入されたし、成熟した胎児は運動をする余地もなく、大きな腹筋の圧力が胎児の身体全体を圧迫していた。排泄もままならず、母体に依存しなければならない状況だった。養分摂取および老廃物の排泄の自己調節、あるいは自由な行動・運動が不可能だったのである。

しかし状況は誕生後まったく一変する。空腹でも泣声をあげさえすれば、乳房が口元までやってきて授乳してくれるだろう。満腹になったならば自発的に乳房から口を離せばよい。乳汁がアルコールあるいはニコチンで汚染されてその味が悪ければ、これを選択的に拒否できる。排泄は垂れ流しが公認されていて、自分で段取りをしてだれにも気兼ねしないで排泄してもよい。したがって乳児期では乳児は気儘に行動していいわけで、これをもって、乳児は自己調節的な、すなわち自律的な存在だと規定するのである。これを従来、依存的だと決めつけてきたのは、ひとえに乳児は手間がかかりすぎるとする大人側からの勝手な判断にしか過ぎなかったと言えるのではないか。乳児の理解は、乳児の立場に立ってこそ確かなものが得られるのである。

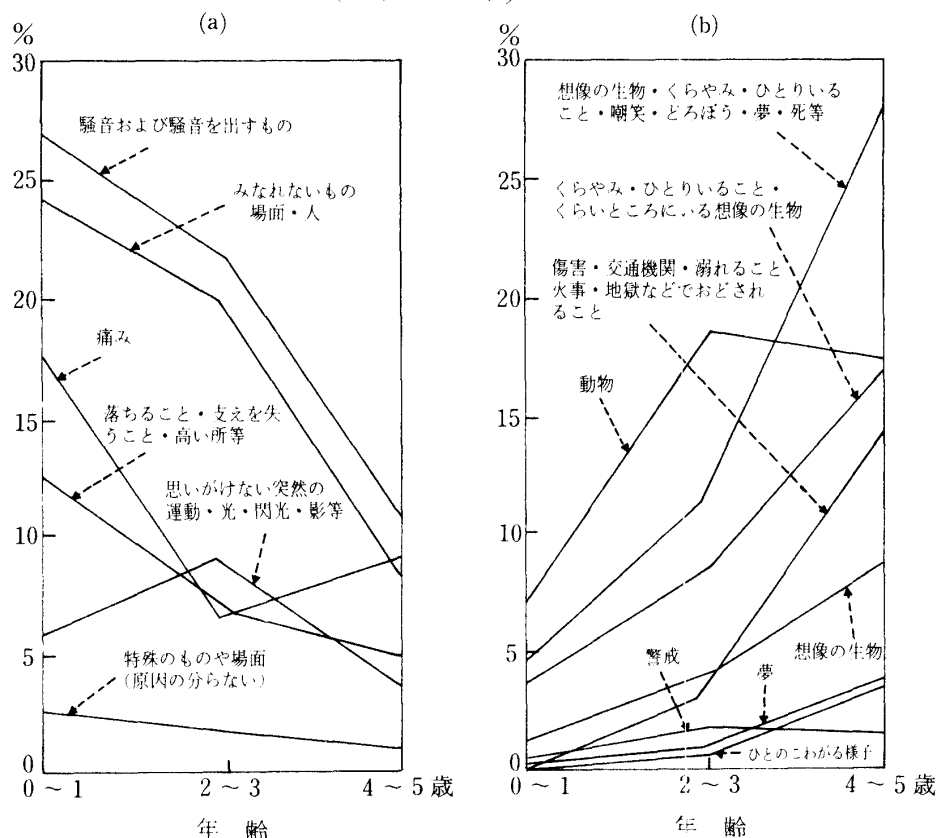
[したがって法則として確定]

仮説 4. 『乳児の行動は動的・探索的・選択的である』

「検証」 乳児は周囲にたいして強い興味・関心をもち，機会をえれば対象を見結めたり，それに手をさしのべたり，とらえようとしたりして，探索行動をおこなう。探索行動とは乳児ではある物体を他と比較し，食物か否か・美か醜か・善か悪かといった価値判断をする行動と考えられる。これは行動的思考，あるいは直観的思考という。ところが「Aは自分にとって快である。故にAを採る」「Aが不快である，故にAを採らない」というのは合理性と論理性とが未分化な形を示しているともいえる。また，自己以外のAという対象があるということで，個体の価値判断の行動によっては客観性が未分化な形で存在していることになる。したがって探索行動の経験が多いほど，多くの対象の比較および選択をしているわけで，このとき，合理性や論理性，果ては判断力が養われると考えるのが自然のようである。また探索行動それ自身は実証的・実験的であることを示している。

乳児は合理的であり，客観的な思考をもっていることについて，A. J. Jersild (1959) の調査が有名である（図 3）。

図 3 恐れの対象の年齢的变化⁽³⁾⁽⁴⁾
(ジャーシルド)



この恐れの対象の年齢別による変化表が教えてくれることは，0～2歳までの子どもの恐れの対象は，騒音および騒音を出すもの，痛み，上から落されることおよび突然の運動と光といった，具体的な，あるいは客観的な事象であるということである。彼は想像上の生物・暗黒・空想物など観念的・主観的な事象は恐れないのである。ちなみに，F. Künkel もまた，乳児期は客観的な思考をするときであるとしている（1930，141—145）。
[したがって法則として確定]

以上のことから次の命題が新しく帰納できる。

命題 4 b 『個体の行動は合理的・論理的・客観的・実証的・社会的である』

卵管内での受精卵の生活にこれを帰納することは、この表現自身が相当疑人的であるので差し控えたい。これは次の段階にて演繹を試ることにする。

仮説 5. 『乳児は乳房から、歯ぐきを通して乳汁を取り込み、腸へ送る』

「検証」 乳児の消化器官は食道から胃に通じているが、胃は未だ貯留器の機能をもっていない。だから乳汁は直接、腸に送られ養分が吸収されるとみてよい。

ただ問題は、養分摂取器官として、なぜ S. Freud のように「口唇」をとらないで「歯ぐき」としたのかであろう。その答は、「母乳」を鍵語とすれば、自ら明らかになる。すなわち、乳児が乳房を口にして乳汁を吸啜するとき、もっとも主要なはたらきを為す部分が、未だ歯のない歯ぐきなのである。

O. W. Winnicott によれば (1963, 33), 乳児は下顎の歯ぐきで乳頭をしごいて乳汁をしぼり出すのだという。——ただし哺乳瓶のばあいには喉と「ほほ」とで吸引するわけで、顎あるいは歯ぐきは必要としない——したがって歯ぐきを養分摂取器官としたわけである。ちなみに、この下顎骨で歯ぐきを咬合させる行動は、顎内静脈の血行を促進させる効果をもち、脳神経細胞分化が盛んなこの時期にはきわめて重大な役割をなしていると思われる。 [したがって法則として確定]

したがってまた次のように命題化できよう。

命題 5 b 『乳児は乳房、歯ぐきおよび腸管という 3 者と生活関係を構成する』

卵管内の生活に帰納してみると、この命題は次のようになるだろう。「卵体は卵管壁、透明層および卵膜という 3 者と生活関係を構成する」。これは卵体期 I—5 から記述された事実と一致することが判明する。つまり、この命題は発生学的にも法則として成立する。 [したがって法則として確定]

仮説 6. 『歯ぐきをつかって吸啜された乳汁が腸におくられ、その養分によって歯ぐきに歯が生えはじめる。「歯ぐき」と「歯」の両者は機能的には相互排他的であるにもかかわらず、対立する歯根に養分をおくるといふ歯ぐきの役割は矛盾をはらんでいるといえる。』

「検証」 吸啜された乳汁は腸に送られ、そこで養分が吸収される。養分は体内に入って身体各部を発育させる。その 1 部は歯ぐきのなかの歯根に分配され、歯を形成させる。歯ぐきが養分摂取の道具であれば、生えてきた歯も養分摂取に必要なものである。歯が生えれば、歯ぐきは単に歯を支えるだけの役割となり、直接養分摂取のためには、歯がかかわることになる。乳汁を吸啜するときには歯ぐきが直接にかかわっていたが、その乳汁は結局、対立する歯を形成することになり、ゆえに実にその機能は歯ぐきにとっては矛盾であるといわねばならない。 [したがって法則として確定]

このことからまた次の命題が導きだせる。

命題 6 c 『成長のきわみには，歯が数多く生え揃い，そのために乳汁を吸啜することが困難になり，したがって，身体には養分供給が不十分となる。そのため，乳児は歯ぐきで乳を吸啜する生活を脱することになる』

卵管では，個体は成長のきわみには血管が数多く成長し，そのために従来の方法で養分を摂取することが困難になり，したがって，このために体内には養分供給が不十分となる。そのため，個体は従来の方法で養分を摂取する生活を脱することになる。 [したがって法則として確定]

そして，次の仮説へと移行する。「遂には血管（臍帯）が従来の方法にまさって，それを内包し，統合する」。これも卵体期イー 6 に属する記述であることが判明する。

また歯と歯ぐきのそれぞれの機能が相互に排除しあうものであり，対立するものであることから，当然子供は大なり小なり情緒不安定になる。しかし，子どもの成長がすすむにつれて，飢えあるいは緊迫感，およびそれから生じる情緒不安定が昂じ，歯を使わなければならぬ状況に追い込まれる。やがて子供は歯で咬合することの便利さを知るが，このときが，歯が歯ぐきに勝った瞬間と言えよう。しかし勝ったとはいえ，咬合運動は吸啜という顎の行動と同じ行動なしにはあり得ず，この意味で，歯ぐきの機能は歯の機能に内包され統合されたといえる。したがってこれは検証し得たわけで，命題として確定されよう。次にこれを仮説として演繹した場合には次のようになる。

法則 6 b 『遂には歯がまさって歯ぐき（の機能）を内包し，統合する』

仮説 7. 『分化のきわみには，身体機能・精神活動の不安定さから緊迫感が生じ，そのため，乳児は形態形成を強いられる』

「検証」 乳児の体重および身長が増加してくると，乳汁が不足しはじめる。身体の各部分の機能も，たとえば物を握る行動，指で触れる行動，さらに右手ばかりでなく左手でもおなじ行動が発達してくるが，それらはちぐはぐである。単語を発音するが対象と結びつかない。曲線や直線は描くのだが一体ながに描写されているのか判別がつかない。

しかし，これらの飢え・シマ・行動のちぐはぐさなど，つまり緊迫感が続くうち，次第に内面的な構造化がおこなわれてくる。たとえば手に物を持っているとき，他の物を示されたばあい，すぐにそれを握もうとしないで，先にもっていたものを一度左手に持ちかえてから，差し出されたものを右手で受け取ろうとする。やがて，それらが両手に握られるようになる。両足の筋肉の協応もできて，直立姿勢から歩行運動もできるようになる。単語も単に名詞だけでなく動詞・形容詞もならべられるようになる，ついで文法的にまとまった文が，二語文，三語文というように発表できるようになる。「描画」でも曲線が構造化されると円になり，さらにそれは顔の形になってくる。

分化していたすべての行動の統合化・構造化は生体の飢えを満たすように方向づけされている。飢えの程度によって統合化への遅速もあるわけである。幼児はすでに言葉で飢えを表現し，与えられた食事を手づかみで食べられる。飢えによって形態形成（発達）が促進されるのである。

[したがって法則として確定]

乳房から乳汁が充分出るときにはもちろん乳児にとっての依拠対象は乳房である。しかし乳児の身体はいつまでも同じ大きさではない。ところが乳児の歯ぐきに歯が生えてくるし、乳汁の出も悪くなる。したがって子供はそのままでは飢えに襲われることになる。ところがその頃彼に料理を与えてくれたり、水やジュースやミルクを与えてくれたり、また汚れ物を洗濯してくれる人（＝母親）がいることを知る。しかしこの乳房と母親という両者の機能は養分を供給するという面で共通していて、もしどちらかの効率が他を上回れば残る方が否定されることになる。乳房は老化して乳も出なくなるが、代って母親は子供が経験しなかった珍しい料理を用意してくれる。かくして母親が子供にとって主たる地位を占めるようになる。したがって次の命題が設定できる。

命題 8. 『乳房と母親とは乳児にとっては相互排除的であり、最終的に母親（像）が乳房を統合して彼の世界の依拠対象となる』

これを早速胎生期に帰納すると次のようになる。「卵管と子宮とは受精卵にとっては相互排除的であり、最終的に子宮が卵管を統合して受精卵の依拠対象となる」。しかし、このことは現在の発生学では確認し得ないので仮説とするしかない。

ところが、乳児と母親との授乳時において現れる興味ある現象がある。

乳児が乳首に吸い付いて乳を吸啜する時、もし目を開けているならば、乳児は一体その視線はどこに向けられるだろうか。乳児が未だ若いあいだは、乳児はしっかりと母親のふところ深く抱かれ、母親の乳房に顔を埋めるようにして、その乳首に吸い付き、乳を飲む。そしてその視線はしっかりと彼女の乳房を見詰めている。乳児の視力はいたって弱く、極度に近視なのである。これが乳児の同一視対象は乳房である理由であった。しかし、乳児が成長し、視力が増大して遠くの方が見られるようになると、事情は異ってくる。乳児は至近距離の乳房を見てはいられなくなり、その乳房から胸に沿って目を挙げていく。遂には母親のあごから目を見ていくことになる。いうならば、乳房は次の同一視の対象を指し示しているということになる。したがって、ここから次の命題が導かれよう。

命題 9. 『養分供給者は次の同一視対象である養分供給者を指し示す』。

これを胎生期に帰納することが可能か否かということが問題になる。受精卵が卵管内を移動する場合、その移動はすでに子宮腔に導かれることが予定されているのに気付く。つまり、卵管は子宮腔内にその口を開いているからである。ここにわれわれは卵管の役割は受精卵を子宮腔内を指し示すばかりでなく、導いていることを知るのである。したがって、胎生期の命題は『個体の養分供給者は個体を次の養分供給者を指し示し導く役割をもっている』となる。

当命題はこの帰納によって真となし得る。

[したがって法則として確定]

ロ. 幼児期

1歳より6歳までの期間をいう。12箇月で50パーセント、15箇月で80パーセントの幼児が歩行でき

るようになる。母親の乳房そのものより、母親を対象として生活するときである。いや母親に依存(服従)することで養育され保護される期間といえる。

仮説11. 『個体は統合による発達をおこなう』

「検証」 両手の協応、両脚による立ち歩行ができる。言葉も羅列期を過ぎれば文法的に正しい文章での発語ができる。さらに具体的操作、形式的操作の段階に入ってくるのだが、これこそまさに思考様式が調えられてきたことを示すものである。 [したがって法則として確定]

仮説12. 『幼児は母親(養育者)とは求心的な行動関係をもつ』

「検証」 幼児は母親を「核」として生活する。食事をするにも、排泄するにも、すべてに互って、指導を受けるのは母親からである。すなわち母親と幼児とは支配・服従の関係にある。幼児の恣意を抑えて母親の権威は強力である。恣意にまかせれば、幼児の成長は歪められる。すなわち、好むものばかり与えていれば偏食癖が身につく。好むことばかりさせていれば、しつけや礼儀の知らない野人になってしまう。風呂嫌いで、いつも同じ汚れた衣服ばかりを身にまとい、洗顔もせずといった動物のような大人ができあがるだろう。母親の権威は彼女の経験と教養から生まれる。子供はこの母親に絶対といっていいほどの権威を認め服従すべきだと思っている。

この期間に母親は子供に社会が要求するすべてのしつけをしなければならないのは当然である。

[したがって法則として確定]

仮説13. 『幼児は依存的な生活様態をもつ』

「検証」 自律的に乳汁を吸啜するには、限界があることを知った幼児は、食物を得るために、母親に全く依存する生活を選ぶ。幼児からみれば母親(養育者)は万能の魔法使いか、魔術師かである。喉がかわいて泣いていると、彼女はたちまちのうちに冷たい水やジュースをもってきて飲ませてくれるし、何もないテーブルの上に、ほんの僅かな間においしい食物を盛って見せてくれる。寒そうな顔をしていたり、くしゃみをすると暖かくしてくれる。兄や姉たちがいじめるので、大声で泣くと、母親が出てきて子どもたちに何か呪文をいう。実は呪文ではなく、単に叱りつけるのだが、幼児には何を言っているのか不明であるため呪文のようにしか考えられないのである。すると呪文を言われた彼らは不思議なことに静かになってしまう。こうして母親が万能であって依存するに足る指導者であり、保護者であることを認知していく。

子どもはこの母親を基地として生活する。母親のかたわらで遊んでいる子どもは、見知らぬ人があらわれると、急いで母親のところに駆け寄り、抱かれる。腕の中から見知らぬ人を見ていて、彼が危険な人物でないのを知ると、そろりそろりと母親の膝から下り、しばらくすると彼女を離れて遊びはじめる。しかし、それも母親からあまり遠くにいかないで、危険が迫っても母親まですぐにもどられる範囲内に留まっている。母親は安全の基地である。

母親は権力者である。子どもは彼女が命じ、要求することに服従していればまず間違いはない。子

どもは服従することを無上のよろこびと感じ、そこに彼女の愛情を感じとる。支配と愛情は等価関係にある。これらが、幼児は依存的な生活様態をもつとするゆえんである。

なお、母親はこの段階で絶対的といってもいいほどの子どもの服従心を利用して、できるだけ必要とされる生活基本習慣およびしつけを教えなくてはならない。まず歯の咬合の方法、つまり、うどん、まめ、肉の食べ方などの歯の使い方、箸やスプーンの使い方、偏食、過食、拒食などの防止、一日の食事は3回とすることなどから、立って食べない、こぼさない、口をあけたまま食べない、ねぶり箸をしない、箸渡しをしない、あるいはフォークやナイフの置き方、ミルクの飲み方などのマナーを教える。また食べれば出るということだが垂れ流しでは社会へ参入させてもらえないので、母親は自分の育てられ方、教養などから社会が要求するトイレでの排泄法、それ意外にもひとりでする衣服の脱着法、歯みがき、洗顔、手洗い、入浴などの清潔の習慣、さらに決められた時刻での睡眠の習慣などを教えなければならない。その他、挨拶の方法、安全教育から手伝いの習慣までを教えることが大切である。乳児が母親を魔術師、あるいは魔法使いと思いこんで、頼りに（依存）している間にこれらを教えこみ、習慣化してしまわなければなるまい。この時期をはずしては、容易にしつける時期は決してやって来ない。この段階のしつけの責任者はもちろん母親（養育者）である。

[したがって法則として確定]

仮説14. 『幼児の母親にたいする行動は固定的・順応的・服従的である』

「検証」 幼児の心理は、乳児の心理の逆であることから、乳児の心理の特徴である「探索的・選択的」の逆を考えてみれば、理解できよう。乳児の心理の特徴はすでに仮説C－Ⅰ－4 bで述べたように、合理的であり、客観的であり、論理的・実証的であり、社会的であることなどであった。しかし、乳児期の後半に、子どもが乳房の限界を知って、母親を食物供給源として選択したとき、その心理の特徴も同様に乳児期がきわまる離乳期に、逆転して幼児期に発現される。自律性にたいして「依存性」、客観性にたいして「主観性」、論理性にたいして「直観性」、合理性にたいして「魔術性（＝神秘性）」、実証性にたいして「観念性」、さらに社会性にたいする「自己中心性」などがあげられよう（Piaget,1963）。

したがって、固定的であることを幼児期の心理概念に翻訳すると、依存的・主観的・直観的・魔術的・観念的・自己中心的となる。しかし、胎児の生活が胎盤に固定されて、求心的であることと、幼児が依存的であり、直観的であり、魔術的であることとのあいだにどのような相違があるのかは明らかではない。しかしすくなくとも幼児期の特徴すべてが、胎児期の特徴の否定の否定であるか、ある

注1：直立歩行ができるようになったことは自律的な人間になったことを意味するが、また母親への後追い（母親依存）が可能になったことをも意味しよう（Mahler,1975.）。

注2：日本では、幼児は7歳までは神の子どもといわれ、母親は子ども中心に扱うように奨励されていた。また子どもは何も知らないのだから、大切に保護しなければならないとされていた。したがって子どもにかしづき、甘やかすことが普通に行われていた。ヨーロッパでは、子どもは動物であると考えたり、悪魔であるとして、だから子どもは人間社会に適応させるため、何も知らないから、きびしくしつけ教えるべきだと考えている。

いはその過程で副次的に派生したものであることだけは理解できる。[したがって法則として確定]
このことから次の命題が演繹できよう。

命題14b 『幼児の生活様態は依存的・主親的・自己中心的・直観的・一元的・神秘的・観念的・情緒的である』

これを胎児期に帰納すると「胎児の生活様態は依存的・主観的・自己中心的・直観的・一元的・神秘的・観念的・情緒的である」となる。これはやはり、疑人的であり、胎児の心理を検証する方法とてない現在、帰納は先ず無理であろうというものである。したがって、これは仮説として、児童期以降の生活に演繹することになる。

仮説15. 『幼児は歯（咬合）によって摂取した食物の直接の送り先がなく消化器（胃）内に一時貯留する』

「検証」 幼児は生えそろった歯で、食べものを咬み、阻しゃくする。阻しゃくされた食べものは、貯留機能をえた胃に送られ、そこでペプシンを初とするさまざまな消化酵素によって消化（液化）され、適量ずつ、腸管内に導入されて、養分は吸収される。腸は送付目的対象である。幼児になると、歯から入った食物は調節、腸管部におくられるのではなく、一時、胃に貯留され、調整されてから送られるのである。したがって、幼児は歯で阻しゃくした食べものを送る直接の最終目標をもっていない。いわば労働の目的をもっていないともいえる。これに対し、乳児は食物を直接腸に送っていたのである。要約すれば口唇部から歯を頂点とする食道・胃・腸と連続する食物流通系を構成するのが幼児期である。 [したがって法則として確定]

仮説15b 『幼児は母親（養育者）から食べものを受容し、食べものを歯から胃へ送る。つまり、個体は歯を通じて母親と胃との生産関係を構成する』

「検証」 子どもは母親の絶体命令（愛情）に服従するかぎり、十分な食物と保護が与えられるし、さらにその食物の受容法（歯の咬合法）を教えられる。母親はその意味で衣服の裁断・縫製から料理法にいたるまで十分通じていなければならない。もちろん、食事はかりでなく排泄法から、洗顔や入浴などの清潔の習慣、衣服の着脱法から、昼の活動、夜の眠り、しかも早寝早起きの習慣、あるいは挨拶から敬語の使い方などを子どもにしつけなければならない。こうしたしつけを十分に身につけた子どもは、長じれば周囲のおとなから可愛がられ、幸福な生活を享受できる。しつけは、ある意味で、母親・歯・胃という三者からなる生産関係内のルールともいえる。 [したがって法則として確定]

仮説16. 『歯を通じて養分が胃腸に送られ、それによって発育を促された手先が器用になる。手と歯は共に機能的には同じであるが両立できない。相互排除的であり、したがって、歯の役割は矛盾をはらんでいるといえる』

「検証」 歯で阻しゃくされた食物は、胃腸に送られ、養分として体内に吸収される。それによっ

て身体が成長し、手先も器用になる。食料を生産する道具である「手あるいは手先」と、食物を咬合し胃に送りこむ「歯」とは、形態こそ違え、いずれもその発達段階にあっては消化器系の最先端にあって腸に養分を送るためには同じ機能をもつものである。しかし両者は同一段階にあっては消化器系の最先端に同時に機能することはできない。歯が活躍するときには、同時に手先の機能は必要でないし、手先が活躍するときには、歯の機能はその下位に統合されて最先端の機能となることはない。両者は両立できないのである。

幼児期の立役者である歯は、次の児童期という段階では主導権をゆずり渡すことになる手を養っていることになる。したがって自己を否定する対立物を養っているという矛盾した役割を担わされているといわねばならない。

[したがって法則として確定]

仮説16b 『成長のきわみには、幼児の身体は増大し、そのために身体各部は養分の量が制限され、この飢えからくる緊迫感および困難が幼児に作用し、幼児は歯および母子環境を捨てることになる』

「検証」 幼児期の終期には、幼児自体は成熟し養分がそれに伴って必要であるにもかかわらず、歯が比例して増加しない。結局、身体は飢えにおそわれ、生命維持のために、このごろ器用になってきた手先をえらんで、歯の機能を下位に統合し、母親・歯・食道・胃という生活関係を断ち切ってそこから脱出する。これは一般的には「心理的離乳」(Hollingworth)、あるいは「孵化」(M. S. Mahler, 1981, 45~75)とよんでいる。歯を中心にした生活空間、つまり、歯の使い方を教えられる母親の支配する生活空間から、十分に成熟しその利用を時遅しと待ち構えている手先優先の生活空間へと脱出していく。

Margarett Meadによればニューギニア島に住む4種族の成人の儀式について報告しているが、そのうちのイアトムル族の成人式では、男の子は「子宮の家」とよばれる宿へ入れられ、いじめられ、乱暴され、辱められた後で席を与えられる。この子宮の家はわにの口に似ていて、そのしっぽに当たる部分から新たに生れ変って出る。あるいは彼らは子宮の家の中に入れられたり、血液を飲まされたり、太らされたり、養われたり、男の「母親」の世話を受けたりする(Mead, 1961, 97)というのである。

これなど、まさに住民たちが母親の世界から脱出する現象を無意識的に純粋な形で行事化されていると見たい。㊤

[したがって法則として確定]

㊤ この行事に対して、Meadは「女性の役割を軽く見てきた社会に育ったヨーロッパ人には、これはあまりに不自然なこじつけのように見えるだろう」とし、さらに「社会全体がその儀式を女性の役割への羨望、それを真似しようとする願望の上に立てられている……」のだろうと解釈している。

たしかに、彼女の主張のような面も否定できないだろうが、上述したように高次生活空間への精神的移行の象徴的儀式であるとも考えられるのである。なお、女の子どもについては、社会が階層化されているあいには、その精神発達は無視され、女らしさ(母親・歯・胃の生活空間)内に留めおかれてしまい、その成人式は計画されないことになる。たとえば、江戸時代、社会が典型的に階層化されていたため、成人式にあたる「元服式」もまた男の子どもにとってのみの儀式であり、男の子のためにのみ父親が祭司としての役割を果たし、母親・歯・胃の生活空間からの精神的離乳を助けたのである。

仮説16c 『その結果，遂には手先の機能が勝って歯の機能を内包し，それを統合していく』

「検証」 その結果（歯と手先の機能が相互排除的対立的になった結果），手先でまず食糧を十分に生産しておくことが，歯をむやみに咬合させるよりは，重大である，歯の機能がいかにすぐれていても食糧がなければ無用である。食糧があってこそ初めて歯の機能が生きたものとなって生体を維持できる，などの事情が生理的・生物学的に，あるいは発達の明白になってくる。つまり，歯の主導的地位は，今や手先の機能に譲られるのであるが，歯の機能は追放されてしまうのでなく，消化器系のなかに手先に次ぐ地位を与えられ，秩序づけられるのである。 [したがって法則として確定]

また，たとえ現代ならばどの時期であろうとも養分が不足するということはない。そこで再び連想されるのは M. Mead の研究である。ニューギニアの人々は狩猟にでかけ，漁労にでかける。そして獲物は参加者全員に平等に分配される。豊漁のときもあれば，全く獲物のないときもある。豊漁のときは問題はないがそれほど獲物がないうちは大変である。家の中はきっと空腹の子供たちの泣声で騒がしいに違いない。そこで子供は12・3歳になると（あるいはもっとそれ以前であっても）すぐに大人の仲間入りをして，狩猟あるいは漁猟にでかけ，獲物を分配してもらわなくてはならない。部族民たちはたとえその参加者が年端もいかない子供であっても平等に分配してくれるからである。かくして子供たちはいつまでも母親の元に安穩の生活をしてはいられないのである。

現代文化圏では社会制度が違っているのでこのような傾向は一般的であるとは見られないが，しかしその面影は見るのが可能である。幼児が大きくなると母親の与えてくれる食料だけでは不足することになる。それは現代的に言えば，しつけ教育が母親の手で可能か否かということである。その同朋が生まれては言うまでもない。彼は結局，学校と家庭生活の広い世界へ転出しなければならなくなる。したがって次の命題が設定できる。

命題17. 『統合（＝成熟）のきわみには，養分供給が相対的に不足し，子供はその環境からの転出を余儀なくさせられる』

この命題を胎内に帰納すると「胎内にあって，胎児の身長，体重が増加するとともに，臍帯が老化するので総体的には養分の供給が不足し，胎児は子宮腔内からの転出を余儀なくさせられる」となるが，これもまた現代の発生生物学ではそのままの形では肯定できるだろうか。当分はこれは仮説の域に留まっているほかないのではなかろうか。この命題は次の段階にて演繹されることになる。

命題18. 『母親と父親の存在は幼児にとっては相互排除的であり，最終的に父親が母親を統合して彼の世界の依拠対象となる』

また，母親は幼児の生活様態と同じく自己中心的であり，情緒的・直観的・神秘的である。ところが父親は社会的・実証的・論理的・合理的であって前段階の概念とは対立し，両立し得ない，いわば相互排除的であるといえる。ところが幼児期の終期になると，自己中心的・情緒的・直観的・神秘的な子供自体が，社会的・実証的・論理的・合理的な思考様式に変化して，それとマッチする父親が依

抛対象となる。

[したがって法則として確定]

さてここで少し気懸かりな点が出てくる。それは乳児期での命題（あるいは法則）9『養分供給者は次の同一視対象である養分供給者を指し示す』に相当する現象が幼児期から次の段階へ移行するときにも見られるのではないかということである。

そこで一度、排卵時の現象に目を留めることにしよう。先に述べたように、卵管と卵巣は分離していて連続していない。だから、卵が卵巣を出た時、卵は腹腔内を好むままに移動することになる。しかし、腹水の流れが卵管内に導かれていることおよび、卵管采が卵巣の表面を撫で回すように三次元的な動きをしていることなどによって、卵は無事卵管内に導かれる。以上のことを公準化すると「個体は養分供給者から押し出された時、次の段階の指導者を含む周囲の環境はこの個体を次の指導者に導くように協力している」。これを命題として胎生期の他の命題群に加えることになる。一方これを個体の誕生時に演繹すると、次の仮説が設定できる。

[胎児期一仮説19]『新生児が子宮から押し出された時、乳房（母親）を含む周囲の環境は新生児を乳房に導くように協力する』。

生まれた子供にたいしては、病院の助産婦やら付添の家政婦たちはとにかく母乳が出るように助言したり、そのように介助したりする。もし乳が出なくても、新生児が乳房に馴染むように口にくわえさせ、吸啜する練習をさせる。もっとも母乳の必要性が叫ばれるようになったのはごく最近のことではあるが。この命題は事実、出産時にも仮説として検証したわけであるが、さらに演繹を繰り返したい。

[したがって法則として確定]

さらにこの命題を幼児期の後半に演繹すると、次の仮説が設定できる。

仮説19. 『幼児が母親から押し出された時、父親を含む周囲の環境は幼児を父親に導くように協力する』

現今は父親が父親らしくないといわれている(Mitscherlich, 1972, 153)。いつまでも子供は母親の世界に留まって、父親の世界に入り込もうとはしない。母親もいつまでも子供を手元において、ペットのように可愛がろうとする傾向が強い。周囲ではこの傾向に歯止めをかけようとするが、ことは思惑どおりには進んでいないのである。当然、本仮説はこの時点では証明できない。したがって、また胎生期に帰納して、検証しなければならないが、先ほど手順の中で述べたことは現代発生学的には否定しようのない事実の記述である。したがって、それより導き出された本仮説は教育的・規範的な法則とされなくてはならないのである。

ハ. 乳児期と幼児期との両期を通じて

仮説21. 『乳児期から幼児期にいたる期間（一周）は、分化・形態形成・統合の3段階に区別される』

乳児期は，身体および身体の諸機能，情緒，その他が分化するときである。つづいてこれら分化した諸部分・諸機能が統合されて，直立姿勢から歩行・言語習得および直立姿勢といった形態変化が身体の外側および内面に認められる時期がある。つづいてそれらが成長・成熟する時期，すなわち幼児期がある。

Piaget の思考の発達段階からも分化・形態形成・成長の3区分が観察される。彼によれば，感覚運動的段階の(i)生得的な反射の時期，(ii)最初の適応行動の獲得と第一次循環反応成立の時期，(iii)興味ある光景を持続させる手続きと第二次循環反応成立の時期（生後4～8箇月）までがスキーマの獲得，あるいは分化期である。続いて(iv)2次的スキーマの強調と第三次循環反応成立の時期，さらに(vi)スキーマの強調による新しい手段の発明が可能な時期（1.5～2.0歳）までが形態形成期である。つづく前操作的思考の段階以降が統合された諸能力の成熟期に相当する(大伴, 1971, 12.)。

[したがって法則として確定]

仮説22. 『発達に応じて，乳児期・幼児期にはそれぞれ保護者として，乳房および母親が順に用意され，子供はこれを成長の拠りどころ（依拠対象）とする』

「検証」 個体が発達するのに，個体が生得的にもっている発達する力と方向が重要であるが，それのみでは正常な発達は望めない。乳房・母親との生活関係が常に正常に保たれ，中にあって初めて個体は発達する。もちろん乳房とは母親の胸であり，哺乳瓶である。母親とは乳房の所有者であり，哺乳瓶を乳汁で満たしてくれる養育者である。また取り込んだ養分は乳児では腸管に，幼児では胃に送られるから，乳房—乳児—腸管・母親—幼児—胃というそれぞれ3者よりなる生活（生産）関係ができる。そして乳児は他の2者間の中で乳房（あるいは哺乳瓶）に依拠して，自律的な行動が許されること，幼児は他の2者間にあって母親（あるいは養育者）に依拠して，しつけ（発達課題が達成）されることが次への発達を促すことになる。

個体はそれぞれの段階で依拠対象とのダイナミックな生活関係を形成して発達する。なお依拠とは漢和辞典によれば「拠りどころとすること」あるいは「拠りどころとするもの」という意味である。子供は乳房および母親を拠りどころとする。幼児期では拠りどころとするばかりか，母親と同一化して，母親の悪口を言われようものなら，自分が悪口を言われた以上に相手からどんな仕返しを受けようとも，泣きながらも打ちかかっていくといったような反応を示したり，特に女兒ならば母親と同じような振る舞いをして父親に媚びたりする。「依拠する」とはいえ，その意味する以上に子供と母親は強いボン드로結ばれている。

J. Bowlby は次のように論じている。子供には，子供自身特に1つの人物像に愛情を寄せる傾向（彼が一元性 *monotropy* と呼んでいる特徴）があり，母親へのアタッチメントは，他の副次的な人物に対するアタッチメントとは種類を異にするものであると (Rutter, 1972, 10)。しかしこの主張を支持する証拠は充分ではない。H. R. Schaffer (1971) は，Bowlby のこの見解は事実にもとづくものではなく，子供のアタッチメントの広がりには主に子供の置かれている社会的状況によって決定されるものである，大抵の子供たちは何人かの複数の人物とボンドを発達させ，それらのボンドは基本的には

とんど同質のものである，と述べている（Rutter, 1972, 10）。この問題はまだ不明な部分を残していることは銘記されなければならない。 [したがって法則として確定]

仮説23. 『乳児期の生活諸特徴と幼児期の生活諸特徴とは正負の関係，あるいは相互に逆の関係にある』

「検証」 乳児期の生活特徴は2つにわけられる。行動面では遠心的・探索的・選択的である，精神的には合理的・論理的・客観的・社会的である。つまり遠心的である。幼児期でも同じである。行動面では求心的・固定的・依存的である，精神的には魔術的・直観的・主観的（自己中心的）である。つまり求心的である。このことから，乳児期，幼児期の両期の生活特徴はまったく，逆の特徴となっている。 [したがって法則として確定]

二. 全経過を通じて

仮説31. 『第1周の中頃の過渡期において個体はその形態を変換させる』

「検証」 胎内では受精卵は分割して胞胚期にかかるると各細胞への養分の供給が困難になる。胚盤胞ができる頃からその傾向は顕著になる。それが契機となって特定細胞が中心体に配向し，移動し始める。ついでそれぞれの中心体にて組織から器官までが形成され，それらは脳を中心に統合される。このあたりを胎芽という。それが完成した時，養分を養分摂取器官から摂取し，血管を通じてそれを各細胞に滞りなく送り始める。このときには形態は変換されて胎児と呼ばれることになる。

出生の第一周では前半は個体は乳児と呼ばれ，乳児は乳房と同一視し，これを口にすると，歯ぐきでしごいて乳を吸啜する。その終り頃になると，彼の身体は顕著に増大し，また歯ぐきには歯が生えてくる。ということは乳の摂取が困難になって，養分の供給が相対的に不足してくるのである。そこで母親が離乳食を用意するので彼は母親を同一視し始める。すなわち彼は乳房と母親との同一視対象としての選択に苦しむことになる。この頃は噛んでいいものと噛んでいけないものの区別がまだつかない。しかしその期間が過ぎると歯ぐきにはしっかりと歯が生えそろい，何でも噛むことができるようになる。その頃には同じメカニズムで，直立姿勢・歩行・言葉・軟骨の骨化・頭部と身体部との比率の変化などの形態変化が見られる。子供は幼児に成長したのである。

[したがって法則として確定]

考 察

以上発達モデルから得られた仮説について検証した結果，それぞれは現実の個体の生活の中でも真と認められ，したがって，これらにすべて法則として定位されるのである。そこで乳・幼児期の個体の生活様態で検証された法則を結びあわせてみると次のようになる。

イ. 乳児期

乳児期は誕生から上下4本ずつの歯が生えるまでの1年間である。この時期の乳児の対象者は母親でなくて、乳房である。

母親（養育者）とのスキンシップという刺激によって、乳児の発達がはじまる。その発達は主として分化による発達である。乳児は乳房とは遠心的な行動関係にある。つまり乳児は自律的な生活様態をもっていて、その行動は動的・探索的・選択的である。それをさらに具体的に述べれば、合理的・論理的・客観的・実証的・社会的である。乳児は乳房から、歯ぐきを通して乳汁を取り込み、腸へ送る。つまり乳児は乳房、歯ぐきおよび腸管という3者と生活関係を構成する。歯ぐきで吸啜された養分によって歯ぐきに歯が生えはじめる。それまで主役であった「歯ぐき」と新しく生えた「歯」の両者は機能的には相互排除的であるにもかかわらず、対立する歯根に養分をおくるという「歯ぐき」の役割は矛盾をはらんでいるといえる。成長のきわみには、歯も成長し、そのために乳汁を吸啜することが困難になり、したがって、身体には養分供給が不足して、緊迫感が彼を襲う。すなわち歯と歯ぐきとは相互に排除し合うが、遂には歯がまさって歯ぐき（の機能）を内包し、ゆるやかな統合が行われる。（子供は乳房に指示されて次の同一視対象である母親に導かれる。）こうして乳児は歯ぐきで乳を吸啜する生活を脱出することになる。すなわち分化のきわみには、身体・精神の不安定さから緊迫感が生じ、そのため、乳児は形態形成を強いられることになる。（また乳房と母親は乳児にとっては相互排除的であり、最終的に母親が乳房とを統合して乳児の世界に依拠対象となるともいえる。）

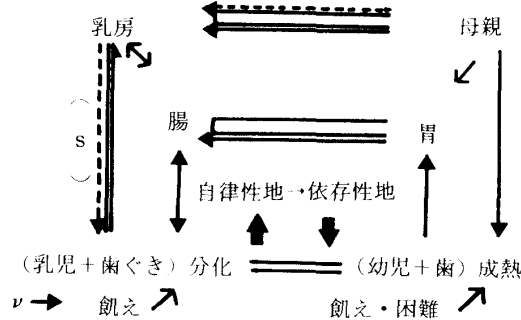
ロ． 幼児期

母親の乳房そのものより、母親を対象として生活するときである。いや母親に依存（服従）することとで養育され保護される期間といえる。

幼児の身体は部分的にはまだ分化が行われてはいるが、主として統合（成熟）による発達をおこなう。幼児は母親に対して求心的な行動関係をもち、さらに生活全般は依存的である。すなわちその行動は固定的・順応的・服従的である。換言すれば幼児の生活様態は依存的・主観的・自己中心的・直観的・一元的・神秘的・観念的・情緒的であるとなる。——母親と幼児とは支配・服従の関係にある——幼児は歯（咬合）によって摂取した食物を胃内に送ることができるようになっている。彼は母親（養育者）から食べものを受容し、受容した食べ物を歯から胃へ送る。つまり、幼児は歯を通じて母親と胃との生産関係を構成するほどに一体化する。母親から食物を与えられて身体が発育するが、同時に手先も器用になる。手と歯は共に機能的には同じであるが、相互排除的である。しかし、歯は食物を咬合して養分を手を送らなければならない。したがって、歯の役割は矛盾をはらんでいるといえる。成長のきわみには、幼児は身体が大きくなるが、そのために養分供給の量が相対的に制限され、この飢えからくる緊迫感および困難が幼児に作用し、その結果、遂には手先の機能が勝って歯の機能を内包し、それを統合していく。こうして幼児は歯および母子環境（家庭）から急激に転出することになる。

母親と父親は幼児にとっては相互排除的である。最終的に父親が母親を統合して子供の世界の依拠対象となる。

図4 発達モデル



⑪

胎生期では“S”は精子であったが、出生後では一体何が乳児にとって精子と同じ刺激となるだろうか。

以上のことから問題になることは2・3あろう。たとえば、従来から問題になってきた授乳法についても、規則的授乳法よりはむしろ欲求即応法が好ましい、いやむしろ、そうでなければならないと考えられるのである。また幼児期は求心的であること、すなわち母親は支配的であり、子供は服従的であるのが発達の様態であるとすれば、幼児期は決して母親は子供を甘やかし、幼児を君主にして、母親が彼に仕えてはならないということである。

また、歯生に始まる離乳期の到来は、実は胎内での受精卵から胎児を形成する過程の胎芽期に匹敵するほどの出来事であること、あるいはそれと同一線上にあることから、これをもって発達の決定的な指標とすることができるということであろう。

以上の記述から第一周のモデルを作ると上図のようになる。これを説明するのに Piaget の構造理論を借用することにする。Piaget によれば、構造の概念には要求される3つの基本的な性格があるという。すなわち、(1)変換のシステム、(2)自動調節機構、(3)全体性である (Piaget 1970, 6-16)。次にそれぞれについて考えてみたい。

(1)変換のシステム：本構造が胎内期の個体の発生過程の形態形成を中心に構成されたものであることはすでに公準化とモデル化において述べたので、胎生期についてはここで改めて詳説することはない。しかしこの変換の過程を下部構造（深層構造）とすれば出生後にもこの変換が繰り返して現われる。

乳児が乳房を同一化対象としている頃、その分泌量は一定であっても乳児の体は成長してくるために、相対的に養分供給量は低下する。さらに歯生が始まれば乳汁の吸啜にも困難が伴って、ますますその量は減少する。同一化対象としての魅力は低下するのである。ところが母親は乳児の『飢え』を察してさまざまな離乳食を与える。この時離乳食を用意する母親の姿に気付きそれに魅力を感じ始める。同一視対象の混乱である。子供は乳房か母親かの選択に悩むわけである。ところがやはり新鮮な食物を準備してくれる母親の魅力がまさって、母親を選択し同一視していく。つまり「歯」と「歯ぐき」との対立は「歯」がまさり、歯ぐきをその下部として秩序づけていくわけである。

同様に母親を同一視している子供は食事を与えられ、成長するが、やはり食料が充分に与えられなくなるために、どうしても自立して己の手で食料を得なければならない羽目になる。手の操作の仕方については父親が充分に承知している。そこで子供は母親か父親かの選択に迷うことになる。また同時に子供は心理的にも自律性、合理性、論理性、客観性、実証性あるいは社会性が発達していくため

に，母親のそれらとは合わなくなる。これを契機として彼は母親を父親の下部構造の一部として位置づけ，父親を同一視の対象としていく。

こうして上部構造が現われると，内容としての諸要素も変換され，変換されても結合関係の本質は不変であることは改めて述べるまでもない。

(2)自動調節機構：発達には常に深層構造が基準になって適合される諸要素だけが選択されて，上部構造を構成していくことである。

本構造に現われた適合の機序とは

(i)正（あるいは負）の要素が負（あるいは正）の要素を選んで変換されてそれ自身が発達する機序，たとえば

自律性	・	合理性	・	論理性	・	客観性	・	実証性	・	社会性
↓		↓		↓		↓		↓		↓
依存性	・	神秘性	・	直観性	・	主観性	・	観念性	・	自己中心性

と変換されているが，それぞれの要素は，それぞれのある特定の要素以外のものは選んでいない。しかもそれらが機械的自動的に行われている。

(ii)段階の変換に際して古い要素が，自動的に新しく現われる特定の要素と対立し，新しい要素が古い要素を統合していく機序，例えば

臍帯→歯ぐき→歯

では，個体は臍帯の後継者として歯ぐきを選び，他の器官を選ぶことはない

(3)全体性：子宮内での胎児の生活状態を表現する諸概念は無数であるといえる。しかし胎児の生活の中心は栄養を摂取することにあるとすれば諸概念の数は限定されてくる。たとえば，胎盤・臍帯・胎児・泌乳・胎児体内血管などが栄養摂取にかかわる概念である。これら概念を使えば数種の文が構成されるが，次もそのうちの1文である。

胎盤から泌乳されると胎児は，臍帯を通じて養分を胎児内血管に送り込む

臍帯は栄養摂取の道具（T），泌乳はその方法（N），養分は所産（Pr）である。したがって上の文は

$T \cdot N \rightarrow Pr$ （→ならば）

となる。次に胎児体内血管を対象（O）として表記すると，

$Pr \Rightarrow O$ （⇒：送付される）

となる。したがって胎児期の名辞・動辞といった概念の全体性モデルは次のように表わされる。

$(T \cdot N = Pr) \rightarrow (Pr \Rightarrow O)$

ここから発達の構造の全体性モデルは次のようになる。

$\forall A_i (T_i \cdot N_i \rightarrow Pr_i) \rightarrow (Pr_i \Rightarrow O_i)$ なお， $i = 1, 3, 5, 7, 9$

(# 普通いかなるAにあっても，TをNにしたがって使うならばPrが生産され，Oに送付される #)

$(O_i, N_i, T_i \in S_i) \vee (O_{i+1}, N_{i+1}, T_{i+1} \in S_{i+1}),$

S = 段階

このモデルから出生の第一周の概念を要素としてその全体性を検証すると次のようになる。

乳児期では子供が授乳にしたがって、歯ぐきを使えば養分が吸啜され腸管に送られる #
そして

幼児期では子供が食事にしたがって歯を使えば食物が阻しゃくされ胃に送られる

こうして全体性の要件とは構成する諸要素が単なる孤立した集合状態であるのではなく、すべての諸要素がそれぞれに不可分の絆によって結びつけられていること、つまり本構造は全体性においてもその要件を満足させることが理解できるのである。また副次的に「不可分の絆」とは意味を成り立たせる文法（＝統辞）であることも期せずして導かれたのである。また養分摂取が胎児の基本課題であるとすれば、今述べたように同じ文法で同じ系統のそれぞれの要素からなる文はそれぞれの段階の基本課題を示していることが指摘できる。つまり、乳児期はとにかく乳を吸啜すること、幼児期はしつけ（基本的生活習慣）を身につけることが基本課題となる。したがって今後の展開は同様にして各段階の基本課題を探索することにもなろう。

なおその経過の中から新たな命題として次のような命題が得られた。乳児期では法則4「乳児の行動は動的・探索的・選択的である」は現実への演繹によって、次のような命題を生じさせることになった。命題4b「乳児の行動は合理的・論理的・客観的・実証的・自律的・社会的である」ただし個体の行動は生活上の特徴と精神的特徴にわけて、考えなければならない。

法則5「乳児は乳房から、歯ぐきを通して乳汁を取り込み、腸へ送る」ではこれらの要素はそれぞれ独立で機能することはないので、特にそれを強調する意味で次の命題を立てることにした。命題5b「乳児は乳房、歯ぐきおよび腸管という3者と生活関係を構成する」。

法則14「幼児の母親にたいする行動は固定的・順応的・服従的である」においては、胎児の生活から抽出された命題の幼児期での演繹としての適応であるが、さらに幼児生活を詳細に観察する限り、命題14b「幼児の生活様態は依存的・主観的・自己中心的・直観的・一元的・神秘的・観念的・情緒的である」となる。

法則15「幼児は歯（咬合）によって摂取した食物の直接の送り先がなく消化器（胃）内に一時貯留する」。したがって命題15b「幼児は母親（養育者）から食べものを受容し、食べものを歯から胃へ送る。つまり、個体は歯を通じて母親と胃との生産関係を構成する」といえるのである。

[要約と結論]

発達モデルと、それを構成する基礎となった諸命題を出生後の乳児期および幼児期の発達行動にて仮説化し、それぞれを検証し得た。

その結果、乳児は同一化対象としては母親というよりむしろ乳房を選んでいること、母親が同一対象となるのは後になってであることが明らかにされた。また伝統的には依存的であると考えられてきた幼児の行動が、実は自律的であって、依存的になるのは幼児期になってからであることが知られた。

その他，乳児期は合理的・論理的・客観的・社会的な傾向をもち，幼児期では魔術的・直観的・主観的（自己中心的）であることが判明した。そして，乳児期から幼児期への変換は新旧の2項対立と新しい要素が旧要素を秩序づける中でなされること，さらに乳児期は乳房を中心にした生産関係が構成され，幼児期は母親を中心にした生産関係が構成されることも論じられた。さらに幼児期では母親は権威的であり，逆に幼児は服従的であるのが生得的な関わりかたであることも知られた。

さらに Piaget のいうモデルの構造についての検討もされたが，その結果，構造の要件，すなわち諸要素はいわゆる弁証法的に移行するという変換のシステム，またその場合には項目あるいは要素の選択も必然的自動的に行われるという自動調節機構，また各段階でのすべての要素はある絆で（この場合は文法あるいは統辞）強く結びつけられているという全体性の3要件のいずれをも満足させうるものであることが明らかにされた。統辞論については発達的な見地から，稿を改めて論じたい。

なお，個体にとって生命維持のための基本的な課題が養分摂取であることから，出生後もこれを発達の課題として捉えていくのが，胎生期的な論理のすすめ方であろうと考えられるのである。

かくして胎生期から演繹された発達モデルは構造としても幼児期までは妥当であることが証明されたのであるが，そうならば現実の諸問題は幼児期までに関する限りこのモデルに合わせて考えられる，つまり，規範的なモデルとして考えられよう。そして，今後はなおもこのモデルを児童期・青年期，さらには壮年期から老年期にまで展開して，普遍であるかどうかを検証されなければならないのは当然である。そこで留意しなければならないことは，それぞれの新しい命題は胎内生活に帰納した時，1つは発生学的にはそれらはまだその研究課題になっていないことや，あるいは2つにはあまり疑人的表現になって，卵体や，胎児にそれらの心理傾向を見出すことは現段階では考えられない，つまり，不可能なことである。したがって，これらの真偽は，後の段階での生活に演繹と帰納を試みることによって検証しなければならないのである。

文 献

- (1) 浅見千鶴子 (1980), 『乳幼児の発達心理学』 1 大日本図書, pp. 75~76.
- (2) Bowlby, J. (1969), *Attachment and Loss: I. Attachment*, Hogarth Press.
- (3) Bridges, K. M. B., (1932), *Emotional Development in early infancy*, *Child Dev.* 3, 324~341.
- (4) 原田政美 (1978), 『子どもの視力』「育児の理論と実際」同文書院
- (5) Harry, F. and M. K. Harlow, (1959), *Love in infant monkeys*, *Scientific American* 200, 68~74 (Off print 429).
- (6) Jersild, A. J. and Holms, F. B., (1959), *Children's Fears*, *Child Develop. Mong.* No. 20.
- (7) Kagan, J., (1971), *Change and Continuity in Infancy*, Wiley & Sons.
- (8) Kroh, O. (1944), *Entwicklungspsychologie des Grundschulkindes*. Langensalza: Hermann Beyer.
- (9) Kuenkel, Fitz, (1930), *Einführung in die Charakterkunde* (3rd), Leipzig: Verlag S. Hirzel.
- (10) Laughlin Jr. C. D. & Eugene G. d'Aquili, (1974), *Biogenetic Structuralism*, Pa: Columbia University Press.
(木幡越士訳 『生物発生的構造主義』 紀伊国屋書店 1985, pp. 197~203.)
- (11) Mahler, M. S., F. Pine, A. Bergman, (1975), "The Psychological Birth of the Human Infant", Basic Books Inc., New York (高橋他 「乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化」 黎明書房, 1981.)
- (12) Mead, M., (1961), *Male and Female; A Study of the Sexes in a Changing World*. William Morrow and Co., (「男性と女性」上巻, 田中寿美子・加藤秀俊訳, 現代社会科学双書, 東京創元社.)
- (13) Mitscherlich, A., (1972), *Auf dem Weg zur vaterlosen Gesellschaft*, Piper & Co. Verlag, (小見山 実訳

- 『父親なき社会』新泉社, 1972.)
- (14) Mussen, Paul. H. (1970), Carmichael's Manual of Child Psychology. Vol. 1 (3rd) John Wiley, New York.
 - (15) 大伴 茂 (1971), 『ピアジェ幼児心理学入門』同文書院.
 - (16) Piaget, Jean, (1970), Structuralism, Basic Books, Inc. Publishers, New York, pp. 6~16.
 - (17) Piaget, J. et al. (1963), The Child's Conception of Space, Routledge & Kegan Paul.
 - (18) Portmann, A. (1976), Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen (高木正孝訳「人間はどこまで動物か」岩波新書, 岩波書店.)
 - (19) Rempflein, H., (1956), Die seelische Entwicklung in der Kindheit und Reifezeit, München: Ernst Reinhard, introduced in "Theories of Adolescence" by Rolf E. Muuss, Random House, Inc. (1969) (岡路市郎監訳, 「青年期の理論」川島書店 1978, 150~159.)
 - (20) Rutter, M. (1972), Maternal Deprivation Reassessed. Middlesex, England; Allen Lane, the Penguin Press Ltd. (北見芳雄, 佐藤紀子, 辻祥子「母親剝奪理論の功罪」誠信書房, 1972, 184.)
 - (21) Schachter, S., (1959), The Psychology of Affiliation. Stanford, Calif.: Stanford Univ. Press.
 - (22) Shaffer, H. R., (1984), The Child's Entry into a Social World, London: Academic Press.
 - (23) _____, (1971), The Growth of Sociability, Penguin.
 - (24) Sullivan, H. S., (1954), The Interpersonal Theory of Psychiatry: W. W. Norton.
 - (25) Werner, Heinz, (1933), Einführung in die Entwicklungspsychologie, (ed.) (矢田部達郎編 『ウェルナアによる精神の発達』東京: 培風館 1953.)
 - (26) Winnicott, D. W., (1963), The Child, the Family, and the Outside World, Penguin Books.
 - (27) 山下俊郎 (1969), 『幼児心理学』朝倉書店.